

サラーム・ムーサーとエジプトにおける世俗主義思想

ラウーフ・アッバース

ラウーフ・アッバース博士 Dr. Raouf Abbas Hamed はカイロ大学文学部史学科講師、昨年六月よりこの三月末までマジア経済研究所の招聘で来日、四月以降も九月まで東外大マジアフリカ言語文化研究所の招聘で滞在延長の予定である。一九六八年来日して本誌にもその論文の一つが紹介された(「アラブ知識人の役割」板垣雄三訳、一九六九年七月号)、カイロ大学文学部史学科近代史主任教授ムハンマド・アハニス博士 Dr. Muhammad Anis の秘蔵弟子で、その『エジプト労働運動史』*al-Harakat al-'Ummaliyya fi Misr, 1899-1952*、*Dār al-Katib al-'Arabi, al-Qāhira, 1968*、『大土地所有制下のエジプト社会体制』*al-Nizam al-'Ijtimā'i fi Misr fi Zill al-Mulkiyyat al-Zawā'iyā, Dār al-Fikr al-Hadīth, al-Qāhira, 1972* の二著があり、

とくに前者は国際的にも先駆的な業績である。現在博士の関心はエジプトと日本の比較近代史とくに土地所有制の比較で、アラブ近代史や日本近代史の研究者たちとともに勉強されつつあ

る。来日してから書かれたものに、「エジプト労働運動小史」『アジア経済』14-1、一九七三年一月、木村喜博訳、「アラブ諸国と日本」『国際問題』No. 155、一九七三年二月、板垣雄三訳)の二論文があり、前者はエジプト社会党、共産党の歴史についてもくわしく、後者はパレスチナ問題をめぐるアラブ、日本関係についても、博士の見解が表明されているので、ぜひ併読していただきたい。

はなはだ突飛な提案と思われるかもしれないが、本稿を読まれる読者は試みに、サラーム・ムーサーを長谷川如是閑なり矢内原忠雄なりに、イスラム主義を天皇制主義に、あるいはまたアフマド・ルトフィー・アッサイイドをたとえば陸羯南に、ターハー・フサインやアッカードを津田左右吉なりに、おきかえて読んでみていただきたい。もとよりこういう乱暴なアナロジーは、はみだす部分を多分に有しており、とうていそれだけで近代エジプトをとらえきれものではないが、とかくおよそ異

質的なものとみられがちなエジプトなりアラブ諸国を、知的・精神的にいくぶんかでも私たちにひきつけてゆくための、一提案として受取っていただければさいわいである。また、社会進化論の思想的役割は同時代の日本や中国においても相当大きな

問題であるが、そうした分野の研究者の方々に、ぜひ比較なり御批判なりをお願いしたい。

(三木 亘)

本稿は近代エジプトの思想的展開のなかでも、尖端的な局面を扱う。というのは、私たちの論じるこの思想家はあきらかに、二十世紀前半中にエジプトの知識人が経験した、不安と動揺の危機を代表しているからである。この危機の特徴は、思想的潮流の多様化と両極への分化であった。そのひとつは、近代ヨーロッパの経験を探るべき範と考える、近代化 *tahdid* の支持派であり、いまひとつは、イスラム文明という大伽藍の再建にエジプト発展の唯一の道を見る、前者に対する反対派である。この二つの志向は、さまざまな政治運動の形で自己を表現し、そのあるものは、今日のエジプトに深刻な影響をおよぼしてきたし、いまでもおぼしつ

つある。もとよりエジプトにおいて、近代化をめざして近代ヨーロッパの世界への開眼をもとめる動きは、古く十九世紀前半にさかのぼる。ナポレオン・ボナパルトに率いられたフランス軍による、短期間の占領(1798-1801)を経験したのち、その混乱に乗じて、一九五二年の革命まで続く王朝をうちたてた、ムハンマド・アリーカダイ、ムの政権のもとに(在位1805-48)、早くも、十八世紀までの伝統的な経済体制を清算して、あらたな体制にかえる試みが行われた。こ

の新体制は、農地国家所有・貿易独占・国営工業など、あらゆる生産源の国家独占を基礎とし、ヨーロッパ人専門家や、ヨーロッパ留学で新しい科学技術を学んだ、エジプト人専門家の努力によって、エジプトに近代的な産業を導入した。しかし一八三九年の英仏の軍事干渉はこの国家独占体制を崩壊させ、それまで工業化と商業化の先導的役割を果たしてきた、その政府に替りうる、何らかの民族的な代替物もないままに、エジプトは世界市場に組み込まれて、外国人の投資や搾取にさらされることとなった。当然これは、外国人の政治的侵略を招き、ついにはオラービー革命の挫折した一八八二年、エジプトを英国の占領下におとし入れることとなった。これ以後第一次大戦後までつづく英国のエジプト全面支配は、エジプトの工業化をおしとどめ、ランカシャーのための「一大棉花プランテーション」に変貌させた。

植民地化によるエジプトのモノカルチャー農業国への変化は、地主制の展開を伴ったが、サラーム・ムーサー *Sādāna Mūsā* は英占領初期の一八八七年、一〇〇フェッダイン以上を持つ、コプトの中等度の地主の子として、下エジプトの新興都市ザカールギークに生れた。コプトは古代からのエジプト土着のキリスト教徒で、十八世紀ごろには、上エジプトに相対的に多く、また収税吏や金貸を営むものが多かったが、ヨーロッパの影響がエジプトに加わ

